

海外司法事情見聞記

フランスの裁判所を訪ねて

原武一實(福岡高等裁判所主任書記官)



パレ・ド・ジュスティス

1. フランスの裁判所

裁判所の厳重な警備

私は、平成7年9月、フランス及び周辺諸国の司法事情を見聞する機会に恵まれた。フランスの裁判所を訪れて最初に驚いたことは、厳重な警備と荘厳な建物である。裁判所の入口では、一列に並び、一人ずつ厳重な身体検査と荷物検査を受けてから中に入る。

当時、パリ市街では、爆弾テロがあちこちで起きていたので、警備態勢は厳重で、誰でも自由に入出入りできる我が国の裁判所のイメージとは随分異なり、近寄り難い雰囲気を受けたが、歴史的背景や現在の社会状況を考えれば仕方がないことであるかもしれないと思われた。

裁判所の建物

パリの真ん中、セーヌ川の中洲にあるシテ島。その昔紀元前3世紀ころ、このシテ島にパリシー人が住み着いたのがパリの始まりで、最初に住み始めたパリシー人にちなんで「パリ」と名づけられたといわれている。そのシテ島に、裁判所[パレ・ド・ジュスティス(Palais de justice)]の建物がある。

パレ・ド・ジュスティスは、日本の最高裁判所に相当する破棄院(Cour de cassation)をはじめ、日本の地方裁判所に相当する大審裁判所(Tribunal de grande instance)、日本の高等裁判所に相当する控訴院(Cour d'appel)が同じ建物の中にあり、シテ島の3分の1を占める重厚な大理石の建物である。もとは王宮であった建物が裁判所として利用されているので、建物自体が荘厳で、美術館としても立派に通用する程の歴史的建物である。

この建物の北側がコンシェルジュリーと呼ばれ、フランス革命でギロチンにかけられたマリー・アントワネットが、1793年8月2日から10月16日の処刑の日まで2か月半を過ごした独房があり、当時の姿がそのまま残っている。また、同じ敷地内には、聖ルイ王が1248年に建てたゴシック様式のサント・シャペル礼拝堂がある。この礼拝堂は壁一面が「パリの宝石」と言われるステンドグラスとなっており、赤や青の色彩がすばらしい。さらに、このシテ島には、パ

りを代表する歴史的建物の一つであるノートル・ダム大聖堂もあり、裁判所を取り巻く歴史的背景を考えると、裁判所に歴史と伝統の重みを感じざるを得ない。

裁判所の組織

フランスでは、我が国と異なり、違憲立法審査権を行使する機関として憲法院(Conseil constitutionnel)が置かれ、また、行政事件の裁判権は、コンセイユ・デタ(Conseil d'Etat)を頂点とした行政裁判所に属しており、司法裁判所とは別個独立したものとなっている。また、裁判官も、職業裁判官ばかりでなく、商事裁判所(Tribunal de commerce)は商人の中から、労働裁判所(Conseil de prud'hommes)は労使それぞれの中から選挙で選ばれた素人の裁判官から構成されるという特色がある。



シテ島(フランス政府観光局提供)

法廷での感想

フランスの民事裁判では、少額事件を管轄する小審裁判所(Tribunal d'instance)を除き、弁護士を代理人に選任することを義務付ける弁護士強制主義が採用されている。長いマフラーの付いた黒い法服姿の弁護士が、長い廊下にあるベンチに座って当事者と長々と話している姿や立ち話をしている姿がいたるところで見受けられた。

フランス社会は、契約書や合意書面がすべてであると言っていいほどの契約社会である。民事裁判でも、証拠の中で公正証書等の一定の書類が優先的地位を占めているので、証人尋問や本人尋問の重要性は我が国と比べて異なる。

法廷では、弁護士が身振り手振りの熱のこもった弁論を展開しているのが見受けられた。この弁論の持ち時間は通常 15 分から 30 分程度であるが、それを超えてかなり長い時間がかけられていた。裁判官からの矢継ぎ早の質問に対して、弁護士が即座に口頭で説明している様子を見ていると法廷での裁判官と弁護士との間の張り詰めた緊張感を感じ、印象深いものがあった。

2. フランスの社会事情

飲酒運転は OK？

滞在中、飲酒運転に対する規制が厳しくなるらしく、「ドライバーが飲んでいいのはワイン 2 杯まで」という新聞記事を目にした。「自動車運転事故の 4 割が酔っ払い運転」といわれているのに、飲酒運転を全面的に規制できないようである。これには、フランスの食事には必ずワインが付きものであるという裏側の社会的事情があり、なんとなく納得してしまう。

EU(欧州連合)の中での変貌

ヨーロッパ各国は、今、EU の一員としての経済及び政治の統合を目指して行こうとしている。今後、ヨーロッパ各国は、重い歴史と伝統を抱えながら大きな変革を迫られることが予想され、その流れの中で、ヨーロッパ各国の裁判制度がどのように変貌していくのか、アジアの中の日本の立場と対比しながら注目と期待をしていきたいと思う。



コンシェルジュリー
(フランス政府観光局提供)